



平成二十四(二〇一二)年度の研究開発推進機構公開学術講演会は、元・同志社大学教授の辰巳和弘氏を講師に招き、『古事記』に読む古代の心―祭祀遺跡はなぜそこにあるか?―と題して、十月二十七日(土)十三時三十分より百二十周年記念一号館一〇五教室において開催され、約二百名の参加者が熱心に聴講

した。辰巳氏は、同志社大学大学院修了後、静岡県教育委員会、静岡の県立高校教諭を経て同志社大学で教鞭を執られた。『形』あるところ「こころ」ありの持論をもって、考古学を柱に学際的観点から「古代のころ」の分析を実践し、日本文化の基層解明を目指されている。『世界へ翔る船』(新泉社)、『聖樹と古代大和の王宮』(中央公論新社)、『聖なる水の祀りと古代王権 天白磐座遺跡』(新泉社)など多数の著作は、専門家だけではなく多くの考古学者ファンを魅了するものである。

平成二十四年は、『古事記』編纂三百年の節目であり、考古学的観点から『古事記』の再考を図る意味で、辰巳氏に講演を依頼させて頂いた次第である。

冒頭に辰巳氏は、「祭祀」についての自身の考え方を「祭祀とは、己や己が所属する集団の意志や力のみでは達成が困難と思われる事態を克服

し解決するため、『人知を超越した靈威をもつ隠れたモノ』Ⅱ『神』の存在を信じ、その靈威に働きかける行為をいう。それは『神の領域(存在)』を認識することであり、『神の領域』と『人の領域』の接点に神が顕現し、靈威の発動があるという認識のもと、マツリゴト(祭事・政治)にかかわるさまざまな考古資料は意味をもつ」と示された。そういった観点から考古資料の属性を見極め、先人の精神や思考、さらには列島に培われてきた日本文化の基層を解明する上で、『古事記』が必須の古典であることは間違いないとした。

さらに『古事記』はもちろん、『日本書紀』『風土記』『万葉集』等々、考古学研究者もこれらの古典をよく読み込んだ上で、遺跡(遺構・遺物)と対峙しなければ、先人の心に参入することは難しいことを示唆された。特にマツリゴトに関わるとみら

れる遺跡が存在する「場」の意味なぜ祭祀遺跡がそこにあるのか、なぜその場所なのかを考えさせられる内容であった。

以下では、辰巳氏の研究姿勢を、本講演においてご自身が示された事例をもって紹介することとする。

天白磐座遺跡の「場」マツリゴトの「場」の事例として辰巳氏がまず取り上げたのが、氏が昭和六三(一九八八)年に発見した静岡県引佐町(現・浜松市引佐町)井伊谷に所在する古墳時代の祭祀遺跡である天白磐座遺跡である。ここは、近世大名として知られる井伊氏

が興った地としても周知されていることを述べられ、井伊氏の祖先が古墳時代に遡る当地の豪族であったことを考古学的に解き明かす内容であった。

すなわち、辰巳氏は、天白磐座遺

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol.6 No.2
 発行人 阪本 是丸
 編集人 遠藤 潤
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0162
 FAX (03) 5466-9237

公開学術講演会
 「『古事記』に読む古代の心―祭祀遺跡はなぜそこにあるか?―」
 辰巳 和弘 (元・同志社大学教授)

目次

- ◆ 公開学術講演会「『古事記』に読む古代の心―祭祀遺跡はなぜそこにあるか?―」
 (元・同志社大学教授/辰巳和弘) 1
- ◆ 共催事業報告 神道六教派特立百三十年記念事業
 公開シンポジウム「二十一世紀の教派神道―百三十年を踏みしめて―」 3
- ◆ 第三十八回日本文化を知る講座「三百年目の古事記」 4
- ◆ 国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程―文学と美術をめぐって―」 6
- ◆ 長野県須坂市委託事業 八丁鎧塚古墳の調査研究 8
- ◆ 國學院大學創立百三十周年記念 特別展「有栖川宮家ゆかりの品々」報告 10
- ◆ 平成二十四年度 伝統文化リサーチセンター資料館活動報告 11
- ◆ 二十一世紀研究教育計画委員会事業
 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告 12
- ◆ 彙報 14
- ◆ 資料紹介「満州鞍山中学歴史研究室旧蔵 画像簿(後漢)」 16



天白磐座遺跡

跡附近の丘陵上には四世紀末から五世紀に継続して築かれた首長墓が存在することから、安定した首長系譜の存在が認められ、同遺跡での祭祀を行った首長の奥津城と理解できるとされた。磐座は薬師山と呼ばれる神奈備型の小丘陵の頂にある巨岩の露頭を中心とした小規模な範囲にあり、発掘調査では巨岩の直下から多量の手づくね土器に混じって、刀・鉞・鏃・鏃といった鉄製武器や工具、滑石製の勾玉も出土していることを明らかにされた。また、周辺の広い範囲で平安時代前期ころまでの須恵器や陶質土器が採集され、さらに二つの巨岩の間では十二世紀にくだる多数の渥美製経筒外容器の破片が出土し、この場において長期にわたる

祭祀が行われたことが解明されている。この場所が聖地であるという記憶が人々の念頭にあったからこそ、そこに経塚が営まれたと考えられ、その経塚造営の作善を行った主体者は、磐座での祭祀を行ってきた古墳時代以来の地域領主の系譜を引く人々のほかには考えられないとし、十二世紀当時の井伊谷の有力者である井伊氏が古墳時代に遡る豪族であったことを説得力をもって説き明かされたのである。

王権祭儀の場Ⅱ高殿

記紀によれば、より政治性の高い祭りである「王権祭儀」を執行するヤマト王権の大王たちは、政治的難局に遭遇し、その対応に迷った際、しばしば夢に神の託宣を請い、神託によって物事を執行してゆくことが語られている。その夢を見るための寢床の設えを『古事記』崇神天皇段や安康段においては「神牀」と表現されているという。辰巳氏の研究姿勢である、古典をよく読み込んだ上で遺跡(遺構・遺物)と対峙し、この「神牀」について考古遺物での比較研究を試みられたのが、古墳時代中期初頭に比定される大阪府八尾市の美園古墳出土の高床建物を模した家形埴輪である。この家形埴輪は、高床の屋内に床より一段高くなったベッドがあり、高床の床の中央には四角い穴が開けられていることから、そこにハシゴが架けられ、架け床を突き上げるように高床屋内に入する部位を表現するものであり、さらに高床屋内の壁が赤く塗られて

いる点から、そこが聖化された清浄な空間であることを物語るといえる。美園古墳の墳丘の中心に置かれた家形埴輪は、現世の人間に見せるための造作ではなく古墳の被葬者のためであり、それが神託のための設えである「神牀」そのものを表現したものである可能性が高いことを示唆された。

楓の聖性を古代道との関連性など歴史地理学の成果を援用しながらさまざまな観点で論じられた。平城宮大極殿の中の高御座が軽の大槻を真南に望む位置にある事実の認識などは、氏の卓見の一つといえよう。

恐きや神の御坂

最後に、ヤマト王権が大化改新の詔で畿内との境界(四至)とした名壱横河・紀伊兄山・赤石櫛淵・近江狭狭波合坂山をはじめ、アヅマとの境をわける足柄坂や碓日坂、さらには美濃国の式内社比奈守神社、駿河国富士郡の姫名郷、さらに越後国頸郡の夷守郷など王権にとってさまざまな意味での「夷」とされる世界へ向かう境を示された。ヤマトタケルの東征物語りでは、『古事記』は足柄坂において、『日本書紀』が信濃坂で、坂や山の神が白鹿となって顕現する。そこは「神の領域」と「人の領域」の接点であるとともに、「こちらの世界(大和的世界)」と「そちらの世界(大和的世界)」とその「周縁世界」の境界域という觀念が読み取れるという。つまりそこは、天につながる神の世界との接点であったという視点であるがゆえに「形代」を伴うマツリゴトの「場」である御坂峠祭祀遺跡(大場磐雄・相山林継編一九六九『神坂峠』阿智村教育委員会)が形成された意味を示された。

以上、磐座・高殿・宇宙樹としての楓、そして坂という四つのテーマについて、それぞれマツリゴトの場に通底する古代人の心意を、モノと場、文献から読み解き、その炯眼を示されたのである。

(文責・内川隆志)

共催事業報告 神道六教派特立百三十年記念事業
公開シンポジウム「二十一世紀の教派神道―百三十年を踏みしめて―」

明治十五(一八八二)年に一派特立した神道教派にとって平成二十四(二〇一三)年は百三十年周年にあたる。これを記念した行事が六月五日に國學院大學で開催された。神道六教派特立百三十年記念事業実行委員会が主催し、國學院大學研究開発推進機構が共催、そして教派神道連合会が後援した公開シンポジウムと、記念式典、祝賀会である。

主催したのは明治十五年に特立した出雲大社教、御嶽教、實行教、神習教、神道大成教、扶桑教の六教派である。同年には神宮教も一派特立したのであるが、神宮教は明治三十二年に財団法人神宮奉賛会となったので、後のいわゆる神道十三派に含まれない。

記念事業の趣旨は、実行委員会により作成されたパンフレットに述べられている。冒頭の箇所には次のようである。

「私共神道六教派は明治一五年五月に特立を受け本年特立百三十年の佳年を迎えました。記念となる年にあたり、立教の精神と先人達の思いを改めて心に刻みつつ、未来に向けて教派神道の役割と将来を展望する機会と致したく、六教派合同で記念シンポジウムを開催する運びとなりました。」

明治十五年は明治期の神道界にとって一つの大きな節目となった

年であった。國學院大學の前身である皇典講究所が設立され、また神宮皇學館も設立された。教部省時代に始まった教導職制度が終息に向かい、神官教導職の分離が決まった年である。これに対応する形で神道教派が七派特立あるいは独立したのである。

この年に一派特立した教派の一つである扶桑教の設立者の宍野半は皇典講究所の設立に関わった人物でもある。これに象徴されるように、皇典講究所の設立と多くの神道教派が特立したことは深い関わりがある。そのような理由もあって、研究開発推進機構が記念行事を共催することとなったのである。

* * *

「神道六教派特立百三十年記念公開シンポジウム」と記念式典は、常磐松ホールで行われた。シンポジウムでは井上順孝副機構長が「二十一世紀の教派神道―百三十年を踏みしめて―」というタイトルで基調講演を行った上で、引き続き行われたシンポジウムのコーディネーターを務めた。

シンポジウムの基調講演は、明治期の神道教派の形成の事情、その後展開、そして二十一世紀の課題といった内容でなされた。パネルディスカッションでは、神習教教主の芳村正徳氏が「教派神道と人生儀礼」

また御嶽教管長の村島邦夫氏が「教派神道と自然崇拜」と題して、それぞれ発題を行った。芳村氏は教派神道と葬儀(神葬祭)との関わりなどについて言及した。また村島氏は、昨今の「山ブーム」に言及しながらも、本来の厳しい山岳修行の意味について触れた。その後、コーディネーターを加えた三人で討議がなされた。

* * *

記念式典では次の六氏がそれぞれ教派を代表して挨拶した。千家活彦氏(出雲大社教)、杉山一太郎氏(扶桑教)、柴田尋之氏(實行教)、飯田典親氏(神道大成教)、芳村正徳氏(神習教)、村島邦夫氏(御嶽教)、である。各氏の挨拶に合わせて、各派の紹介がパワーポイントを用いてなされたので、視覚的理解の手助けもなった。

さらに、同式典では國學院大學を代表して赤井益久学長が祝辞を述べた。続いて、神社本廳総長の田中恒清氏、新日本宗教団体連合会理事長の岡野聖法氏、そして後援団体である教派神道連合会を代表して坂田安儀氏が、祝辞を述べた。

有栖川宮記念ホールに場所を移しての祝賀会では、まず六教派を代表して神道大成教の飯田典親氏、共催団体を代表して阪本是丸機構長がそれぞれ挨拶した。続いて、元文部科学大臣の中曾根弘文氏、神道修成派管長の新田邦夫氏の来賓祝辞が述べられた。最後に實行教管長の柴田尋之氏が謝辞を述べて閉会となった。本機構には校史・学術資産研究セ

ンターがあるが、明治期の神道教派の展開と皇典講究所の関わりについては、まだ未解明の部分がある。今後そうした側面を研究していく上で、この行事が研究開発推進機構によって共催され、人的交流がなされたことの意義は大きいと言える。

* * *

なお、この記念行事の様子は、PDFファイル、動画ファイル、画像ファイル等のデータにまとめられ、DVDとして作成された。また基調講演をもとに加筆された講演録は、『國學院大學研究開発推進機構紀要』第五号に収録されている。

(文責・井上順孝)



第三十八回 日本文化を知る講座 「千三百年目の古事記」

開催の趣旨

第三十八回目を迎えた日本文化を知る講座は、平成二十四(二〇一二年)六月二日(土)、九日(土)、二十三日(土)、三十日(土)の四回にわたり、「千三百年目の古事記」と題して、本機構主催、渋谷区教育委員会共催により、本学百二十周年記念二号館二一〇一教室で行われた。

毎回四百名近い受講者に参加いただいた今回の講座の趣旨は、『古事記』が西暦七一二(和同五)年に完成してから千三百年を迎えた西暦二〇一二年を記念して、現在の研究状況を広く一般の方々に公開することにある。各回の講演者とタイトルは次の通りである。

- 第一回目・六月二日(土)
「外国人が見た古事記」
平藤喜久子氏(國學院大學准教授)
- 第二回目・六月九日(土)
「世界の神話と古事記」
松村一男氏(和光大学教授)
- 第三回目・六月二十三日(土)
「出雲と古事記」
神田典城氏(学習院女子大学教授)
- 第四回目・六月三十日(土)
「古事記の反乱物語―雄略天皇の即位をめぐる―」
谷口雅博氏(國學院大學准教授)



講演概要

「外国人が見た古事記」

平藤喜久子氏(國學院大學准教授)古事記が編纂されてから千三百年となる二〇一二年は、日本学者バジル・ホール・チェンバレンによる英語訳の *MONKI* が公になった一八八二年からちょうど百三十年にあたる。この百三十年の間に古事記は英語、フランス語のほか、ドイツ語、イタリア語、ポーランド語、ロシア語、中国語、韓国語、シンハリ語などさまざまな言語に翻訳されてきた。平藤氏は、はじめに十九世紀に海外で古事記が注目されることになった時代背景、学問背景や、チェンバレンの *MONKI*、またほぼ同時期に出版されたレオン・ド・ロニによる *MONKI* の特徴を論じた。また、ここ数年の間にイタリア語、スペイン語、ドイツ語の翻訳が相次いで出版されたことから、それぞれの翻訳の概要について紹介がなされた。

このように多くの言語に翻訳されている古事記であるが、違う言語に訳すということには、当然さまざまな問題がある。そこでとくに西欧言語に訳したときの困難さについて、固有名詞のローマ字化を例に取り上げて考察した。漢字の意味を訳するか、あるいはその読み(音)をローマ字化するのか、また上代の音に近づけてローマ字化するのか、ローマ字化はヘボン式か訓令式か、といった問題にそれぞれの翻訳者がどのように向かい合ってきたのかを述べ、最後にそうした困難について日本の研究者がどのようなサポートをするかが可能かを論じた。



「世界の神話と古事記」

松村一男氏(和光大学教授)松村氏は、それまでの多くの日本人の経験が伝承され、それが朝廷の神話としてまとめられたものである可能性が高い『古事記』には、日本人の歴史的経験がまつており、その文化的意義を世界に向けて発信し

ていきたいと述べた。そのことを踏まえ、氏は世界の神話のなかで日本神話がどのように理解できるのかを「災害の神話」と「太陽の神話」という二つのテーマから論じた。

「地震の神話」では、一八五五年の安政の大地震の後に流行した鯨絵を取り上げ、鯨を地震の原因とする神話表現が、他地域の神話とどう比較しうるかを論じた。たとえばウナギ(蛇)が地震や洪水を起こし、カニなどが退治するという神話は、石垣島からフィリピン、インドネシアにも認められる。それらを参考にすれば、日本の鯨が地震を起こしたという神話も、こうした神話の残存である可能性がある。このような例の他、講演では、地震の神話について、大地の巨人が原因となる神話、男女の神の性交が原因となる神話などの類型を挙げて論じた。



国際研究フォーラム 「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」

日本文化研究所では毎年、研究所プロジェクト内容と密接に関連したテーマでの国際研究フォーラムを開催してきている。本年度は、「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」をテーマとして、平成二十四(二〇一二年)九月二十九日(土)に、常磐松ホールにて開催した。共催は、科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」ならびに、宗教文化教育推進センター(CERC)である。

今回のテーマは、宗教文化教育が宗教・宗教学研究以外の領域にも関わる問題であることを意識して、関連する領域の最近の研究を参照しようとするものであった。

文学と宗教文化との関わりは深さは言うまでもないことであるが、実際に教育の場でそれを意識して講義を行う場合にはどのようなことを考慮すべきかに焦点を当てた。最近では若い世代は文学に親しむ機会が減っていると言われる。そうした中で教育のあり方はより困難さを抱えている。

美術の中でも特に西洋美術はキリスト教文化と密接に関わったものが非常に多い。視覚に訴える教材がより多くなった現在では、美術を宗教文化教育に用いる割合は増えると考えられる。

また最近ではアニメやマンガなどの

ポップカルチャーは若い世代が日常的に接するものになってきているが、ここにも宗教文化教育に関わる問題が潜むことは明らかである。

このような現状認識のもとに、それぞれのテーマに関わる専門領域の研究者を招き、議論を行った。

* * *

フォーラムは十三時から十八時の五時間にわたり、四つのセッションが設けられ、最後に総合討議が行われた。各セッションの発題に対しては、それぞれコメントによるコメントがなされたのち、フロアを交えての質疑応答がなされた。各セッションの発題者、コメントは次の通りである。

・第一セッション

発題：ロベルタ・ストリッポリ

(Roberta Strippoli)氏(アメリカ、

ニューヨーク州立大学ビンガムト

ン校)「古典文学のなかの宗教」

コメント：加瀬直弥氏(國學院大學)

・第二セッション

発題：有田英也氏(成城大学)「運

命に抗う人びと—宗教で読むカ

ミュの『ペスト』—」

コメント：伊達聖伸氏(上智大学)

・第三セッション

発題：小池寿子氏(國學院大學)

「『死の舞踏』に見るキリスト教的

死生観」

コメント：平藤喜久子氏(國學院

大學)
・第四セッション

発題：マーク・マックウィリアムズ

(Mark MacWilliams)氏(アメ

リカ、セント・ローレンス大学)

「イエスの再生—映画、マンガ、ア

ニメにおける救世主のポップカル

チャーの変容—」

コメント：小原克博氏(同志社大

学)

司会は、全体を通して井上順孝(國

學院大學)が担当した。

冒頭で井上が企画の趣旨を述べ

た。日常生活・文化の中に溶け込ん

でいる宗教を見ていくことの必要

性、その素材としての広い意味での

文学・美術に着目することの意義に

ついてである。

各セッションの発題とコメントの

概要は以下の通りである。

第一セッションでは、日本古典文

学を専門とするストリッポリ氏が、

アメリカの大学生に教える際の問

点・対策・教材について発題した。

源氏物語や平家物語などを教えて

いる経験に基づいての話であった。ほ

とどの学生は日本文化について学

んだことがなく、また民族も多様

なため文化的背景も異なる。そう

した中で試みの具体例も示された。

たとえば平家物語と聖書中のエ

ピソードを比較させて考えさせるこ

と、デイスカッションを多くして文

化的背景の多様性を逆に活用するこ

と、英語の教科書などではなく日本

語のテキストそのものをなるべく読

ませること、などである。そして、

知識を包括的に教授するのではなく

関心を喚起することに重点を置いており、また学生自身の宗教や文化を考え直す契機となっていることを指摘した。

それを受けて、中世神道史を専門とする加瀬氏は、アメリカの学生だけではなく、実は日本の学生にとっても古典文学やその背景にある宗教文化は縁遠いこと、さらには教える側である文学研究者の宗教文化理解も問われてくることを指摘した。そして、そこに宗教文化教育のさらなる展開の可能性があるという見解を述べた。

またフロアからは源氏物語などの場合、天皇という存在について日本人が持っている認識を伝えることの難しさもあるのではないかといった指摘もなされた。

第二セッションでは、現代フランス文学・思想を専門とする有田氏が、カミュの小説『ペスト』を読み解きながら、その文化的時代的背景について、かなり詳しく自説を展開した。「文学の理解・教育」と「宗教文化の理解」との間に難しさを、文学を読み込んでいく態度に即して語った。ペストの問題は死の問題に直結している。宗教にとつて最も中心的な死の問題について扱うことの難しさが論じられたとも言える。

それを受けて、宗教学を専門とする伊達氏は、カミュの時代から時を経て、かつ非キリスト教的社会である現代日本において、同時代の宗教的感性とヒューマニズム理解を基盤とする『ペスト』がどう読まれるのかと問うた。また、東日本大震災

を踏まえて、災厄・災害を「宗教文化」の理解と関連させてどのように捉えるかという点をコメントした。

不条理な死というのは宗教にとつて厄介な問題であるが、宗教文化教育を入門編から中級編・上級編と進めるときには、そこから目をそむけるわけにはいかないだろう。

第三セッションでは、西洋中世キリスト教美術史を専門とする小池氏が十五〜十六世紀ヨーロッパで流布した図像「死の舞踏」を事例に発題した。同氏は、「死の舞踏」が実際に人々によって踊られたという「舞踏説」を取りながら、それが図像となることで死に関する視覚的な教育効果の高いものとなったと述べた。

実際にヨーロッパ各地の教会にある死の舞踏の絵画を観て回ったという小池氏は、それが人々にどのような心理的影響をもたらしたかについて、非常に興味深い見解を示した。また個々の絵に登場する人物やその人物が携えているモノについても、説明を加えた。

それを受けて、神話学を専門とする平藤氏が、現代の身近な諸例を挙げながら、死というものを図像を通じて見ようとする心性の今昔の異同について問うた。また、それによる道徳・規範教育的な効果についても、地獄図との比較に言及しながらコメントした。

ペスト同様、死の問題に関わるテーマであったが、図像化されたものは、心理的影響がより大きい。講義におけるこうした類の絵画の利用は、教える側にそれなりの素養と配

慮が必要と思わせる発表であった。

第四セッションでは、マックウイリアムズ氏が、アメリカと日本のポップカルチャーにおけるイエスキリスト像をめぐって発題した。同氏は、さまざまなイエス映画について説明し、アメリカの映画に登場するイエスの描き方に影響を与えた絵について紹介した。

そして、イエスの苦難の生涯をリアルに描こうとして話題となったハリウッド映画『パッション』(メル・ギブソン監督)に焦点を当てた。この映画をイエスとブツダの現代日本での生活をコミカルに描いたマンガ『聖☆おにいさん』(中村光)と対照させて、両者の表象の違いについて言及した。

それを受けて、宗教学・キリスト教思想を専門とする小原氏は、いずれのイメージも社会や文化が形づくること、しかも伝統的な文化というよりポップカルチャーがその担い手となっていることを指摘し、それが文化的な枠を超えて受容可能なものなのかを問うた。

四つのセッションの後に行われた総合討議では、フロアから多くの貴重な意見や質問が出された。個々の事実に関するもの他、全体に関わる大きな問題も提起されたが、その中から、いくつかを紹介しておく。

本機構の客員教授である土屋博氏(北海道大学)は、小池氏に対して、中世は「死の舞踏」にリアルなものがあったと思うが、それは現代における死の状況に対しても有効などこ

ろがあるのかを問うた。死の舞踏が通時代的にもつ要素があるかどうかの問いかけである。

土屋氏は、マックウイリアムズ氏にも質問した。それはポップカルチャーにおけるイエス像の再創造は、キリスト教文化のさらなる発展と言えるのか、それとも歯止めがない自由勝手な営みなのかということである。

小田淑子氏(関西大学)は、山中弘氏(筑波大学)が議論の中にビジュアルとインビジュアルというテーマがあったと提起したのを受けて、イスラームとヴィジュアルの問題を問いかけた。今回なされているような議論においてはイスラームの宗教文化に関する事柄は射程に入りにくいのではないかということである。

こうした題材を使って宗教文化教育を行う際の学生の持っている宗教への配慮や彼らの宗教に関する基礎知識についての議論も起こった。

これについて、マックウイリアムズ氏は、アメリカの学生たちも自分たちの宗教について十分に知っているわけではないという見解を示し、ストリッポリ氏は宗教よりジェンダーの方が問題化されやすいと述べた。そしてそもそも自分の宗教だけにしか関心のない学生は授業に出てこないということもつけ加えた。

なお、本フォーラムの様子は、前編六十分・後編四十五分に編集され、CSのスカイパーフェクトTV!216chベターライフチャンネル「精神文化の時間」において放映された。放

映日時は以下の通りである。同番組はCS環境になくても、スマートフォン端末等からの閲覧も可能である。

・前編

平成二十四年十月三十一日(水)二十時三十分〜二十二時三十分

・後編

平成二十四年十一月七日(水)二十時三十分〜二十二時三十分
平成二十五年一月九日(水)二十時三十分〜二十二時三十分

日本文化研究所が毎年開催している国際研究フォーラムの様子が、「精神文化映像社提供の「精神文化の時間」において放映されるのが、恒例となってきた。放映されたものは、同社のご厚意により、DVDとして寄贈されており、蓄積を重ねている。こうした記録類を宗教文化教育の現場において活用していく方法についても、今後考えていきたい。

(文責・井上順孝)



長野県須坂市委託事業 八丁鎧塚古墳の調査研究

一、委託事業の受入れ経緯

(一) 学術資料館の事業

学術資料館(考古学資料館部門)においては、教員・研究員の企画による考古学的研究・博物館活動と、その実践を通じた若手研究スタッフ(大学院生・学部生等)の育成を行ってきた。具体的には、「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開」事業、「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」事業、「伊豆諸島における在地信仰の考古学的研究」事業や、日常の資料館運営業務が、その中核を担っている。

これに加えて、平成二十四(二〇一一)年度には、新たに「八丁鎧塚古墳調査研究業務」を実施することとなった。同事業は、将来的な八丁鎧塚古墳の国史跡指定を目指す長野県須坂市より、本学が調査研究資金の支出を受け、発掘調査記録・関連出土資料等の再整理を行い、古墳の全体像を明らかにしていこうとするものである。

(二) 委託契約の締結

同事業を学術資料館が受託するに当たっては、平成二十三年度から長野県須坂市より、打診を受けていた背景がある。しかしながら、そもそも当館は、学生に対する教育参考と、本学所属研究者の研究発信を本務とする組織であり、このような事業を外部機関の要請によって受け入れる

ことは想定してこなかった。

とは言え、この八丁鎧塚古墳は、永峯光一氏をはじめとする考古学研究室関係者が一次調査を実施した本学ゆかりの遺跡である。また、大場磐雄博士資料にも、一次調査の関連資料が含まれており、同古墳の調査研究に当たっては、本学の学術資産を活用することができる。そこで当委託研究事業については、これらの諸点を鑑み、学術資料館にて受託する方針を固めた。

ただし、関連規程も未整備の状態であったため、阪本是丸機構長と機構事務課が中心となり、須坂市と当該事業の受託契約に係る入念な折衝を重ねた。その結果、平成二十四年七月十日をもって、須坂市長と本学学長との間に調査研究業務委託契約が結ばれ、須坂市生涯学習スポーツ課と緊密な連携をとりつつ、学術資料館が調査研究業務の遂行に当たることとなったのである。

二、八丁鎧塚古墳の概要

(一) 地理的環境

では、具体的な事業の内容に触れる前に、八丁鎧塚古墳の概要について触れておこう。

長野県須坂市は、北信の千曲川東岸に位置し、千曲川に注ぐ松川や百々川などによって形成された扇状地を特徴とする。鎧塚古墳が含まれる



る鮎川古墳群は、百々川の南を流れる鮎川の段丘上に営まれており、その全長は東西約二kmに及ぶ。上流域・中流域・下流域に支群が認められ、それぞれ鎧塚古墳群・塚の越古墳群・天神古墳群と呼ばれている。

いずれも、未調査の事例が多く、耕作の邪魔になる礫を積み上げた「ヤックラ」も散在しているため、積石塚古墳との見分けが難しい。また、築造時期の特定も困難だが、概ね古墳時代中期から後期にかけての古墳群と考えられてきた。

(二) 既往の調査

八丁鎧塚古墳群は、六基の古墳からなる。しかし、所謂「八丁鎧塚」の名で通ってきた古墳は、直径二十m・二十五m級の一号墳と二号墳であり、大正十二(一九二三)年に上高井教育会の要請を受けた鳥居龍藏教授らが踏査したことで、一躍世に知られることとなった。



大場磐雄博士資料 (八丁鎧塚関連資料)

初めて発掘調査の手が入ったのは、昭和三十二(一九五七)年のことである。上高井郡誌の編纂を主目的とした同調査は、桐原健氏の慫慂を受けて大場磐雄教授が指導し、永峯光一氏と、亀井正道助手が担当した。一号墳と二号墳について、墳丘中央のトレンチを基底部まで掘り抜いた結果、何れもマウンドに土砂を含まない純粹な積石塚であることが確認されている。また、一号墳では、方格規矩鏡片、石釧、装身具(貝釧・勾玉・管玉・小玉)、鉄製武器(鉄鏃・鉄矛・直刀片)、鉄製品、若干の埴輪、土師器などが出土した。二号墳では、金銅獅噛文銚板、ガラス小玉、鉄製武器(鉄鏃・刀)、鉄製品、馬具(轡・鈴杏葉)、多量の埴輪、土師器などが発見された。このような成果によって、両古墳は昭和四十(一九六五)年に県の史跡、出土遺物は四五(一九七〇)年に市の有形文化



二号墳より一号墳を望む
(上段：一次調査時、下段：平成二十四年十二月)

財に指定されている。
その後、昭和六十(一九八五)年には、市道横松原鍔塚一号線の拡幅改良にともない、道路敷設部分の保護を目的に二号墳の範囲確認調査が行われた結果、多数の埴輪が出土するとともに、埴丘規模が直径約二十四mであることが明らかとなった。
さらに、平成四(一九九二)年には、史跡整備事業のため須坂市が周辺用地を買収し、平成六(一九九四)年にあらためて両古墳を調査した。一号墳では、主に土師器の出土が認められ、四世紀後半に属するものと推定されるに至った。二号墳では、埴輪多数が出土した他、南側に箱式石棺ともなう張り出し部の存在が指摘され、既往の出土資料の評価をもとに、五世紀後半に属するものと位置付けられた。また、この両古墳の間に、直径十二・五mの六号墳が存在することも明らかとなった。

(三) 鍔塚古墳の特徴
かかる鍔塚古墳の最も大きな特徴は、礫を積み上げた積石塚であることにほかならない。類例は中部高地に多数見られ、長野県大室古墳群や、山梨県の桜井・横根古墳群などが知られている。積石塚の構築については、渡来系文化の影響を受けたものとする評価がある一方、石材の散布状況に規制されているとの見方もあるが、まずは実態の詳細な調査が欠かせまい。踏査によって積石塚の立地環境を確認し、加えて使用石材の調査などを進める必要がある。
また、二号墳から多数出土した埴輪には、B種ヨコハケに類する板ナデが施された円筒系埴輪や、形象埴輪片も見られる。北信地域における埴輪の展開を考える上で、重要な研究対象となるものであり、埴輪生産体制の復元や、その背景に存在する古墳時代中期の政治構造を垣間見て

いくことも不可能でない。
このほか、南島産の貝輪や、韓国にも類例を求めることができると金銅獅喃文鍔板が出土した事実は、鮎川古墳群、東日本といったローカルな視点だけではなく、日本列島、東アジアといった、様々なスケールからの検討が可能であることを示している。
三、今年度の調査研究
(一) 調査研究計画
このように、数々の興味深い特徴を具えた八丁鍔塚古墳ではあるが、委託業務の契約手続上、単年度事業とせざるを得ない。そこで今年度は、既往の調査で作製された図面・写真類のデジタル化を行うとともに、出土遺物のうち最も数量の多い埴輪を主な対象として基礎整理を実施することとした。
もつとも、複数年度にわたる調査で得られた出土資料を、ここで改めて再整理する前には、既往の調査・整理状況を確認・記録することが欠かせない。そのため、須坂市より委託された資料は、細片至るまで悉皆的に記録し、既刊の報文、関連資料と比較する。このような作業を行うことによって、遺物に記された注記の意味を読み解き、出土年次、出土箇所などの復元が可能となる。その上で、まずは隣接する調査区ごとに埴輪の接合を試みて個体識別を行っていくことが肝要であろう。
ただし、これらの積石塚に樹立されていた埴輪は、盛土古墳の事例と異なり、原位置を留めている資料が期待できず、器面も荒れたものが少

なくない。そのため、細片を含めた胎土分類・器種分類・製作技法分類も可能な限り進め、埴輪の全体像を把握していきたい。

(二) 現地踏査

これに加えて、去る平成二十四年十一月三十日から十二月二日にかけて、当館の教員・事務課・学生からなる事業関係スタッフが須坂市を訪問し、調査研究計画の進捗状況を報告するとともに、積石塚古墳を中心とする関連遺跡の踏査を実施した。その結果、鮎川古墳群では、川原石を用いた積石塚が卓越している一方、坂田大塚古墳のように標高が高い例は、同じ積石塚であっても山石を使用しているなど、立地環境と使用石材の相異が認められた。

なお、この出張に当たっては、先行して方格規矩鏡片の記録・調査を実施するため、その借用を受けることとした。

四、小結

以上、当事業の受託経緯と研究計画について瞥見してきた。古い調査事例を含む資料群を対象とする事業であるため、先に示した通り、先ずは過去の調査情報を整理・把握していくことが肝要である。今年度は、図面・写真類のデジタル化が完了し、受託遺物の分類を継続しているところだが、それらの資料化も併せて加速化していきたい。受託事業の実施は、当館にとっても初めての試みであり、今後の事業推進に際しても、益々の御理解と御協力を請うものである。
(文責・深澤太郎)

國學院大學創立百三十年周年記念
特別展 「有栖川宮家ゆかりの品々」 報告



有栖川宮熾仁親王肖像画
エドアルド・キヨッソーネ作 明治時代

し、百周年記念室にて展示を行ってきたが、その閉鎖にもない収蔵庫で保管されてきた。この度、本学創立百三十年周年を記念し、当館の「國學院の学術資産に見るモノと心」展示スペースにおいて、その一部を展示する運びとなった。開催期間中は多くの来館者が訪れ、いずれも精巧で美術的価値の高い宮家ゆかりの品は、見る人の目を楽しませた。

概要

会期：平成二十四年十月二十七日(土) から十二月二十日(木) まで
会期中入館者数：三九四七名
主な展示品

- 有栖川宮熾仁親王肖像画
エドアルド・キヨッソーネ作
エッチング (銅版画) 明治時代

特別展開催の主旨
本学は明治十五(一八八二)年に
皇典講究所が設立されて以来、百三
十年を迎えた。その初代総裁に就任
された有栖川宮第八代熾仁親王は、
飯田町で行われた開齋式に臨み、教
職員と学生に対し「国体の講明」と
「徳性の涵養」を柱とする学問の要
諦を示された。この精神は本学の
依って立つところであり、現在にま
で受け継がれている。

平成九(一九九七)年四月四日、
高松宮宣仁親王妃喜久子殿下のご高
配により、御襲藏して来られた有栖
川宮の御遺品、宣仁親王・喜久子兩
殿下ゆかりのお品を拝領した。拝領
した品々は、書、工芸品、馬具、楽
器、茶道具、香道具、勲章、肖像画
など多岐に及び、三百品目を超える。
拝領後は、長く、校史史料課が管理



菊御紋散蒔絵御重硯



銀製籠入り牙彫野菜 (ミニチュア)

- 有栖川宮熾仁親王肖像画
エドアルド・キヨッソーネ作
エッチング (銅版画) 明治時代
- 有栖川宮熾仁親王 大勲位菊花頸
飾
- 有栖川宮熾仁親王 大勲位菊花大
綬章
- 皇典講究所総裁の食器類
- 書架 銘「住吉の浦」熾仁親王第
三王女宜子所用 明治時代
- 和歌懐紙幅『冬日詠寄地祝言』
熾仁親王
- 百人一首
- 菊御紋散蒔絵御重硯
- 広口水差 第七代中川浄益(頼実)
作 江戸時代
- 花卉図丸文散蒔絵鞍・鏡
- 業平蒔絵印籠 銘「光柳」砧打牙
彫根付瑠璃緒締・熾仁親王所用
- 沃懸地菊螺鈿印籠 銘「芝山」・
菊花形彫漆根付・珊瑚花形緒締
- 銀製籠入り牙彫野菜(ミニチュア)
- 銀製懐紙入・銀製化粧箱(ミニチュア)



ミュージアムトークの様子

ア) 銀製コーヒー・ティーセット イ
ギリス(ガラード社製)(ミニチュ
ア)
○銀食器一式 フランス(バカラ
社・クリストフル社製)(ミニチュ
ア)
なお、特別展の会期終了後、平成
二十五年一月七日(月)からは、展
示資料の一部を入れ替えて常設展示
としている。

〈関連事業〉ミュージアムトーク

展示品の解説ならびに来館者から
の質問等に答えるため、ミュージア
ムトークを開催した。時間はいずれ
も十四時から一時間程度で参加者は
合計二十五名であった。

第一回 平成二十四年十一月十日(土)
第二回 平成二十四年十二月八日(土)
解説：益井邦夫(本機構客員教授)
(文責：加藤里美)

平成二十四年度 伝統文化リサーチセンター資料館活動報告

本年度は平成二十三年度まで実施してきたオープン・リサーチセンター整備事業が終了して初めて臨む一年であり、本学創立百三十周年を迎える節目の年となった。年間に四回の企画展に加え、百三十周年を記念した特別展として、「国学の始祖 荷田春満展」、「有栖川宮家ゆかりの品々」展を開催した。「有栖川宮家ゆかりの品々」は一部の資料の展示替えを経て、常設展示となっている。また、十一月より教育普及事業の一環として、これまで特別展などで行ってきたミュージアムトークを定期的に実施し、展示物と関連する研究成果の公開活動を開始した。

特別展(國學院大學創立百三十周年記念事業)「国学の始祖 荷田春満展」
会期：平成二十四年十月二十七日～十一月十日

「有栖川宮家ゆかりの品々」
会期：平成二十四年十月二十七日～十二月二十日

企画展
「物語絵巻の世界」
会期：平成二十四年五月十三日～二十日(第六十五回美術史学会全国大会関連企画)

「古典籍でたどる日本文学史―「魂の記憶」と「異国とモダニズム」―」
会期：平成二十四年六月一日～四日(主催：全国大学国語国文学会共催・研究開発推進センター)

「物語にみる源平合戦―國學院大學学びへの誘い―」
会期：平成二十四年七月十四日～二十一日(國學院大學学びへの誘い)

九州の弥生時代と考古学
会期：平成二十五年一月十五日～二月十六日(学術資料館企画)

「身体としての土器」(予定)
会期：平成二十五年二月二十五日～三月三十日(学術資料館・考古学研究室共同企画)

「漢墓に副葬された明器」
会期：平成二十四年八月二日～十一月一日(学術資料館企画)

「神話世界の考古学」
会期：平成二十四年十二月十日～平成二十五年三月三十一日(学術資料館企画)

ミュージアムトーク
展示に関する研究成果の公開と、来館者が常設展示への理解を深め気軽に質問を行える場として、定期的なミュージアムトークを開始した。神道関連展示に関するものを毎月一日、考古学関連展示を十五日とし、解説時間を原則として十四時から十分、参加自由・申込不要としている。また、特別展・企画展の会期中には、担当者によるミュージアムトークを実施した。各回の参加者はメモをとり、質問をするなど、熱心に解説を聞く様子が見受けられた。



ミュージアムトークの様子

特別展「国学の始祖 荷田春満展」

第一回 十月二十八日(日) 十二時十五分より

第二回 同日十四時十五分より

解説：根岸茂夫(本学文学部教授)・松本久史(本学神道文化学部准教授)

特別展「有栖川宮家ゆかりの品々」

第一回 十一月十日(土)

第二回 十二月八日(土)

解説：益井邦夫(本機構客員教授)

企画展「九州と弥生時代の考古学」

第一回 一月二十九日(火)

第二回 二月九日(土)

解説：柳田康雄(本学文学部教授)

企画展「身体としての土器」(予定)

第一回 三月九日(土)

第二回 三月二十三日(土)

常設展【神道関連展示】
第一回 十一月一日(木)
解説：上西亘(学芸員)

第二回 十二月一日(土)
解説：上西亘(学芸員)

第三回 二月一日(金)
解説：上西亘(学芸員)

第四回 三月一日(金) (予定)
解説：大東敬明(学芸員)

第五回 三月十五日(金) (予定)
解説：宮川博司(学芸員)

月	人数(人)
1月	629
2月	550
3月	861
4月	1,247
5月	2,265
6月	2,224
7月	3,100
8月	1,189
9月	654
10月	2,574
11月	2,246
12月	870
合計	16,369

入館者数集計年(平成二十四)

文責：加藤里美

二十一世紀研究教育計画委員会事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画に基づき推進されてきた「共存学」「渋谷学」をあわせて学部横断型の学際研究事業とし、「共存社会の構築」を目標に、本学の特徴を活かした地域・社会貢献に向けて発展させるために、研究開発推進センターのマネジメントにより、まずは平成二十三年度の単年度で合同事業が開始、方針の検討が進められた。三年間の継続事業としては、本年二十四年度が初年度となる。

本事業では既にこれまでの準備及び方針検討により、研究対象として「Ⅰ 渋谷」(渋谷を中心とした東京の都市形成史と都市的現実についての研究)

「Ⅱ 地域(農山漁村)」(地域社会の共同性・拠点・持続可能性に関する研究)

「Ⅲ 日本」(日本の伝統文化や社会政策における「共存」の知恵の可能性と限界の研究)

「Ⅳ グローバル化する世界」(地球規模での共存社会の可能性についての研究)

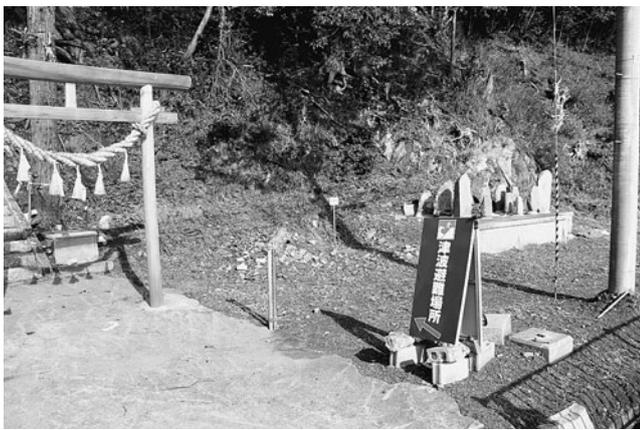
の四領域を設定し、領域Ⅰを渋谷学グループが、領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを共存学グループが主に分担しつつ、領域横断的な成果集約を図ることを定めている。

本年度も両グループがそれぞれ担当領域において、協調・共生・共

存・葛藤・対立等々のキーワードを視野に入れながら、通時的・歴史的な視角と、共時的・社会的な視角から、諸関係の持つ多様な性質を把握することに努めた。

更なる学際的な研究展開に向けて、今後更に、研究グループ合同によるアプローチ、課題の共有、共存社会構築に向けたモデルの抽出作業および検討における連携、研究者のネットワーク形成、などを進める必要がある。

以下に本年度の活動について、渋谷学及び共存学のグループごとに報告する。



渋谷学グループ

渋谷学の活動としては、まず本学創立百三十周年記念事業の一環として、公開講座「渋谷学 ―今と昔とこれからと―」を、六月十六日(土)、二十三日(土)、三十日(土)の十時三十分〜十二時に、本学渋谷キャンパス百二十周年記念二号館二一〇三教室で開催した。第一回「渋谷の現在と未来 ―しなやかな発想で変わる街の構造―」は西樹氏(シブヤ経済新聞編集長)、第二回「渋谷の近世 ―谷間の風景とその変貌―」は根岸茂夫(本学文学部教授)、第三回「渋谷の一つ目小町・代官山の来し方、行く末」は田原裕子(本学経済学部教授)が講演し、現在駅周辺の再開発が劇的に進んでいる渋谷地域を、〈今〉〈昔〉〈これから〉という三つの視点からわかりやすく解説した。

研究会活動では、渋谷学研究会(祭りからみる都市・渋谷)として、十月二十日(土)十四時〜十八時、本学学術メディアセンター棟五階会議室〇六において、第一報告「祭りからみえる渋谷 ―金王八幡宮例祭を中心に―」は秋野淳一(本学大学院博士課程後期在籍)、第二報告「都市祭礼と芸能の関係 ―八王子まつりを中心に―」は高久舞(本機構ポスドク研究員)が、それぞれ研究報告を行った。その後、コメンテーターの阿南透氏(江戸川大学教授)、小川直之(本学文学部教授)のコメントを受けて、フロアを交えて議論が展開された。

平成二十三年度に開催した渋谷学シンポジウム「結節点としての渋谷



―江戸から東京へ―」については、その内容をもとに、広く一般に頒布するブックレットを作成中である。同シンポジウムの発題者とテーマは、「幕末維新期における青物市場 ―青山久保街を事例として―」岩橋清美氏(東京都公文書館)、「幕末維新期、藩邸をめぐる人の移動 ―伊予西条から渋谷へ―」吉岡孝(本学文学部准教授)、「近世後期における江戸「神祇職」の集団移転」松本久史(本学神道文化学部准教授)であり、コメンテーターに北原進氏(立正大学名誉教授)、竹ノ内雅人氏(飯田市歴史研究所)を迎え、司会は根岸茂夫が務めたものである。

そのほか、以下の二点の刊行物を編集・刊行した。

國學院大學渋谷学研究会・石井研士(本学神道文化学部教授)編著「渋谷学叢書3 渋谷の神々」(雄山閣、



共存学グループ

共存学グループでは、対象領域の全体的輪郭を階層的また遠近法的に描くために、「共存学への旅立ち」を掲げた書籍『共存学・文化・社会の多様性』(弘文堂)を平成二十四年三月に刊行した。同書は第一部で「共存学」の出発点となった文化多様性と持続可能社会を論じ、以下第二・三・四部を領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの成果報告とする構成となっている。本年度の活動ではまず、同書の内容検討から、共存社会モデル抽出に向け基本的な問題構造を把握することを目的に、「共存学研究会」を前半期中心に五回行った。この中で執筆者十五名のうち学内研究者八名による研究発表がなされ、それを踏まえた全体討議により、さらに学際的考察を深めた。

平成二十五年三月発行)は、神道・仏教・キリスト教・新宗教・民俗宗教など、諸宗教の多角的な視点から渋谷を考察した書籍である。石井のほか、本学の遠藤潤(研究開発推進機構構想教授)、黒崎浩行(神道文化学部准教授)、藤田大誠(人間開発学部准教授)、高久舞、秋野淳一が執筆している。

同編『渋谷聞きがたり』小倉基が語る東京と渋谷―元都議会議長・前渋谷区長のオーラルヒストリー―(平成二十五年三月発行)は、サブタイトルにもあるが元都議会議長・前渋谷区長である小倉基氏のオーラルヒストリーを、上山和雄(本学文学部教授)が中心となり、手塚雄太氏(鎌ヶ谷市郷土資料館学芸員、元本学研究補助員)の解説を付して編集したものである。

また前年度より企画・準備を進めていた、領域Ⅳの公開研究会「東アジア地域の共存を考える」を、国内外より専門研究者を招いて、盧溝橋事件七十五周年となる平成二十四年七月七日に実施した。発題者と論題は、安成日氏(黒竜江大学)「東アジア地域共存、共栄のための制度的アレンジ」森川裕二氏(富山大学)「アジア地域形成と共存・共栄社会の課題」康成文氏(哈爾濱商業大学)「日韓両国の対中国東北三省経済協力比較」で、モデレーターを高橋克秀(本学経済学部教授)が務め、東アジア共同体構築の可能性、その意味や問題点などが討議された。東アジアの国境問題の深刻化はこれより少し後のことで、当研究会ではこの問題を

直接の課題としていないが、「共存」実現をめぐる困難な条件のひとつとして、当然ながら領土問題も既に指摘されていた。この公開研究会の内容は、平成二十五年三月刊行の『研究開発推進センター研究紀要』第七号に収録される。

出張調査としては、領域Ⅳ及びⅡの課題に属し、特に自然環境・生活文化の価値多様性と世界経済・持続可能性と直結し、日本の政府およびNGOも力を入れている「生物多様性条約」第十一回締結国会議(インド・ハイデラバード市)に参加した。前回(平成二十二年・名古屋)会議に続く会議傍聴と関係者との交流により、共存社会をめざす国際社会最先端の取組みについて、多角的な把握の試みを続けている。



また十一月には前年九月に続き、東日本大震災以降の地域再生と共存社会を考える領域Ⅱ及びⅢの調査として、岩手県の一関市、および大槌町、釜石市を訪ね、同県中南部地域の震災復興、内陸部と沿岸部の相互支援にみる共同体の役割を調査した。平成二十五年二月十七日(日)には、この調査でご協力を頂いた被災者や支援者の方々を登壇者とし、また関連研究者を本学に招いて、共存学公開フォーラム「震災復興と文化・自然・人のつながり」(岩手三陸・大槌の取り組みから)を開催する。

上述の通り、本事業では『研究開発推進センター研究紀要』への論文掲載、研究会・フォーラム等の開催、書籍等の出版などの成果報告を精力に行っている。建学の精神に則り、人間と人間、歴史と現代、都市と地域、などの関係に注目し、地元から世界までの遠近法的な領域を設定して「共存」の構造を求め、総合的研究領域を開拓する本事業では、通常の研究推進と成果報告のみならず、成果の社会還元も重要な活動である。こうした活動の手段や担当者・組織についても、大学としての社会貢献のあり方を総合的に考慮しつつ、更に検討を重ねる必要があると考える。

(文責・森悟朗、菅浩二)

彙報

会議

○全体

- ・平成二十四年度第二回企画委員会、平成二十四年七月十八日(水) 十一時～十一時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十四年度第三回企画委員会、平成二十四年九月十二日(水) 十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十四年度第二回人事委員会、平成二十四年九月十二日(水) (持ち回り稟議)
- ・平成二十四年度第二回教員等資格審査委員会、平成二十四年九月十二日(水) (持ち回り稟議)
- ・平成二十四年度第三回運営委員会、平成二十四年九月二十日(木) 十六時十分～十六時五十分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十四年度第四回企画委員会、平成二十四年十一月十四日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十四年度第三回人事委員会、平成二十四年十二月十九日(水) 十七時～十七時四十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・平成二十四年度第四回人事委員会、

○日本文化研究所

- ・平成二十四年度第二回所員会議、平成二十四年七月十一日(水)、十一時～十一時四十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十四年度第三回所員会議、平成二十四年九月五日(水)、十一時～十一時三十分、A M C棟五階会議室○六

○日本文化研究所

- ・平成二十四年度第五回企画委員会、平成二十四年一月三十日(水) 十一時五分～十二時五分、A M C棟五階会議室○六

○学術資料館

- ・平成二十四年度第二回学術資料館会議、平成二十四年五月二十二日(火) (持ち回り稟議)

○校史・学術資産研究センター

- ・平成二十四年度第二回校史・学術資産研究センター会議、平成二十四年七月二十五日(水)、十一時～十一時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十四年度第三回校史・学術資産研究センター会議、平成二十四年十二月十九日(水)、十一時～十一時四十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○研究開発推進センター

- ・平成二十四年度第二回研究開発推進センター会議、平成二十四年八月七日(火) 十六時三十分～十七時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十四年度第三回研究開発推進センター会議、平成二十四年一月十五日(火) 十五時五十分～十六時五十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- ・第三十八回 日本文化を知る講座「千三百年目の古事記」、共催Ⅱ渋谷区教育委員会、各回、十三時三十分～十五時三十分、百二十周年記念二号館二〇一教室

- ◇第一回 六月二日(土)「外国人が見た古事記」、講師Ⅱ平藤喜久子(國學院大學准教授)
- ◇第二回 六月九日(土)「世界の神話と古事記」、講師Ⅱ松村一男(和光大学教授)
- ◇第三回 六月二十三日(土)「出雲と古事記」、講師Ⅱ神田典城(学習院女子大学教授)
- ◇第四回 六月三十日(土)「古事記の反乱物語」、講師Ⅱ谷口雅博(國學院大學准教授)

- 日本文化研究所
 - ・国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程―文学と美術をめぐって―」、平成二十四年九月二十九日(土) 十三時～十八時、A M C棟一階常磐松ホール、パネリストⅡ Roberta Strippoli (アメリカ、ニューヨーク州立大学ビンガムトン校)、有田英也(成城大学)、小池寿子(國學院大學)、Mark MacWilliams (アメリカ、セント・ローレンス大学)、コメンテーターⅡ加瀬直弥(國學院大學)、伊達聖伸(上智大学)、平藤喜久子(國學院大學)、小原克博(同志社大学)、司会Ⅱ井上順孝(國學院大學)、共催Ⅱ科学研究費補助金基盤研究(B)

「宗教文化教育の教材に関する総合研究」、宗教文化教育推進センター(CERC)

○学術資料館

・体験学習講座「勾玉づくり―自分だけのアクセサリを作ろう―」共催)・主催)白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、平成二十四年八月十八日(土)、十三時～十六時、平成二十四年八月十九日(日)、十三時～十六時、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館

○研究開発推進センター

・公開研究会「東アジア地域の共存を考える」、平成二十四年七月七日(土)十三時三十分～十六時、AMC棟一階常磐松ホール、報告)安成日(黒竜江大学哲学と公共管理学院教授)「東アジア地域共存、共栄のための制度的アレンジ(制度構築)―東アジア共同体構築における苦境と出口―」、森川裕二(富山大学極東地域研究センター特命助教)「アジア地域形成と共存・共栄社会の課題―北東アジアの共生課題と時空間―」、康成文(ハル濱商業大学経済学院副研究員)「日韓両国の対中国東北三省経済協力比較」、モデレーター)高橋克秀(國學院大学教授)、総合司会)菅浩二(國學院大学教授)

・第一回渋谷学研究会「祭りからみる都市・渋谷」、平成二十四年十月二十日(土)十四時～十八時、AMC棟五階会議室)六、第一報告)秋野淳一(國學院大学大学院)「祭りからみえる渋谷―金王八幡宮例祭を中心

に―」、第二報告)高久舞(國學院大學ポスドク研究員)「都市祭礼と芸能の関係―八王子まつりを中心に―」、コメント)阿南透(江戸川大学教授)・小川直之(國學院大学教授)

出張

○学術資料館

・内川隆志・伊藤慎二・石井匠・朝倉一貴、研究事業「伊豆諸島における在地信仰の考古学的研究」の調査のため、沖繩本島・南大東島、平成二十四年七月二十四日(火)～七月三十一日(火)

・笹生衛・加瀬直弥、研究事業「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」の調査のため、奈良県奈良市、平成二十四年八月二十三日(木)～八月二十四日(金)

・内川隆志・深澤太郎・石井匠、研究事業「伊豆諸島における在地信仰の考古学的研究」の調査のため、東京都御蔵島村、平成二十四年八月二十八日(火)～八月三十日(木)

・内川隆志、研究事業「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開」、「東日本大震災文化財レスキュー事業」への派遣のため、福島県相馬市、平成二十四年九月五日(水)～九月六日(木)

・岡田莊司・笹生衛・加瀬直弥、研究事業「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」の調査のため、岩手県遠野市・宮城県塩竈市・多賀

城市、平成二十四年九月十三日(木)～九月十五日(土)

・笹生衛・加瀬直弥、研究事業「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」の調査のため、奈良県奈良市、平成二十四年十一月二日(金)

・黒崎浩行・加瀬直弥・齋藤しおり、研究事業「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」の調査のため、宮城県岩沼市・福島県相馬市、平成二十四年十一月三日(土)～十一月五日(月)

・内川隆志・深澤太郎・加藤大二郎・橋本梨沙・鈴木志穂・吉澤花織「須坂市受託事業」八丁鎧塚古墳調査研究業務委託(国史跡指定事業)の調査のため、平成二十四年十一月三日(金)～十二月二日(日)

○校史・学術資産研究センター

・齊藤智朗「全国大学史資料協議会二〇一二年総会・全国研究会」のため、同志社大学、平成二十四年十月十日(水)～十二日(金)

○研究開発推進センター

・「第十一回生物多様性条約締結国会議および関連行事への参加」のため、古沢広祐・菅浩二、平成二十四年十月十日(水)～十月十七日(水)

(菅)・十月十三日(土)～二十日(土)(古沢)、インド ハイデラバード

・岩手県南地域の震災復興・相互支援にみる共同体の役割調査)のため、古沢広祐・黒崎浩行・菅浩二・宮本誉士・冬月律・筒井裕、平成二十四年十一月一日(木)～三日(土)、岩手県一関市・大槌町・釜石市

・「北海道神宮に関する史料調査」のため、中野裕三・森悟朗、平成二十四年十一月七日(水)～九日(金)(森)・八日(木)～九日(金)(中野)、北海道札幌市(北海道神宮)

刊行物

○日本文化研究所

・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所発行『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第五号(平成二十四年九月三十日発行)

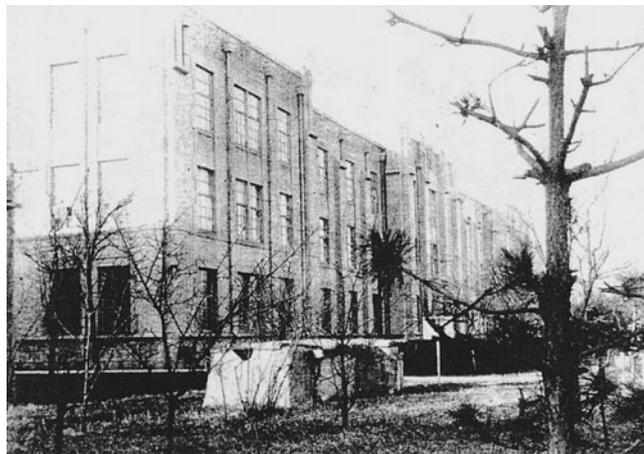
資料紹介 満州鞍山中学歴史研究室旧蔵

画像磚 (後漢)

ここに紹介する画像磚は、旧満州国(現・中華人民共和国)遼寧省營口市熊岳城で出土したもので、後漢時代(一世紀～三世紀)に比定される。奥行二十七cm、正面十六cm×九cmを計る。熊岳城は、烏居龍蔵(一八七〇～一九五三)、八木昇三郎(一八六六～一九四二)らによって紹介され、早くより満州考古学の要地として注目されてきた遺跡である。



画像磚



鞍山中学校舎

ものを画像磚と呼んでいる。長江流域では狩などの生産活動を描いたものが多く、遼東半島では抽象的な動物文が顕著とされる。本資料のように浮き彫りの線描写によって、抽象的な人面あるいは獣面を表現するものは希少である。

本資料は、現在、学術資料館(考古学資料館部門)で調査・研究・整理を進めている「梅本俊次寄贈資料」である。

梅本俊次氏は、本学二十期(明治四十五年)大学部国史科の卒業であ

り、戦前満州国鞍山市において南満州鉄道株式会社が運営していた鞍山中学の教諭を務めながら、鞍山を中心とする満州の考古学的調査・研究に携わった人物である。満州における氏の考古学的業績は「満州考古学餘話」(梅本一九三四)に代表されるように、鞍山周辺の画像石や古墳、新石器時代などについて先駆的な研究が知られている。

昭和八(一九三三)年には、本学を辞し、中国に渡った烏居龍蔵が鞍山中学を訪問し、収蔵されている画像石を見学したことを縁に、遼代に比定される上石橋子古墳を梅本氏らとともに発掘調査するに至ったことなども本学考古学史のなかでも注目すべきところであろう。

梅本氏率いる鞍山中学歴史研究室には、大正十五(一九二六)年以來蒐集されてきた二千点以上にのぼる多数の考古遺物が収蔵されていたことは、本館に「梅本俊次寄贈資料」とともに保管されている『鞍山中學校歴史研究室蒐集品目録』(鞍山中学歴史研究室編一九三三)に詳述されている。巻頭の序文には、

満鉄中等学校地理歴史研究会が大正一五年九月、本校において開催され其際鞍山出土画像石が郷土史的資料として注意を喚起してより漸く郷土史の研究に志し、画像石に於いては新たに支那部落八卦溝より探し求め、之を研究室内に収蔵

し、更に千山駅付近より数個を貰ひ受け、画像石としての総てを網羅するに至った。

(中略)

而も生徒諸君の熱心なる蒐集により関東州内に於ける石器の多数を得、且又篤志家寄贈をも得て今やその蒐集せられたるもの二千餘点の多数に及び研究室内は狭隘を告ぐるに至った。

(後略)

とあり、蒐集は、鞍中生の協力、即ち歴史(郷土)教育の一貫として位置付けられていたことも興味深い。目録には、鞍山以外の旅順や遼陽、長春、洛陽、朝鮮の会寧など周辺各地から同校の研究活動に賛同した個人寄贈資料も多数認められる。

現在、調査研究を推進している「梅本俊次寄贈資料」は、天箱にして約五十箱に及び、吉田恵二教授、深澤太郎助教の指導の下、大学院で中国考古学を専攻する院生を中心に整理作業を進めている。それによって、あらためて国内では極めて重要な資料群であることが再認識され、徐々にその内容についての具体的事実が明らかになりつつある。

平成二十四(二〇一二年)八月には、伝統文化リサーチセンター資料館において「漢墓に副葬された明器―満州鞍山中學校歴史研究室旧蔵資料より―」と題した特別列品を行ったところ、鞍山大宮小学校、鞍山中學校卒業生の皆様に来館して頂き、当時の鞍山市の様子や学園生活について詳しくお話を窺うことができ、縁は今も続いている。(内川隆志)